

論 文

晩年のマルクスと周辺資本主義分析

——「ザスーリチへの手紙」とその草稿を中心にして——

若 森 章 孝

I 問題の所在

マルクス(1818—1883)の『資本論』が非西欧的社会に生きる人びとによって研究され、その社会の経済発展を分析するための理論基準として摂取される場合、最晩年の彼が執筆した「ザスーリチへの手紙」とその草稿が『資本論』と非西欧的世界とを媒介する方法的基準をあたえている文献として注目されてきた。彼はこの手紙の中で『資本論』、とくにその本源的蓄積論の直接的適用範囲が「西ヨーロッパ諸国に明示的に限定されている」¹⁾ことを確認するために、フランス語版『資本論』から次の箇所を引用する。「資本主義制度の根本には、それゆえ、生産者と生産手段との根底的な分離が存在する。……この発展全体の基礎は、耕作者の収奪である。これが根底的に遂行されたのは、まだイギリスにおいてだけである。……だが、西ヨーロッパの他のすべての国も、これと同一の運動を経過する」²⁾。本源的蓄積論の適用が西ヨーロッパに限定され、ロシアを含む非ヨーロッパに妥当しないのは、前者では資本制的生産の創生が自己労働にもとづく私的所有の資本制的私的所有への転化によって媒介さ

1) Marx-Engels Archiv, hrsg., D. Rjazanov, Bd. I, Frankfurt A. M., 1926, S. 341.

平田清明訳「ヴェ・イ・ザスーリチへの手紙」『マルクス=エンゲルス全集』第19巻、大月書店、238ページ。以下、「ザスーリチへの手紙」およびその草稿からの引用は(Ar. S. 341, (19) 238ページ)のように略記する。

2) Ar. S. 341, (19) 238ページ。

れたのにたいし、「ロシアの農民にあっては、彼らの共同所有を私的所有に転化させる」³⁾ことが問題となっているからである。したがってマルクスは、共同所有の解体を「歴史的宿命性」と考えるか、それとも、共同体を「社会的再生の拠点」と考えるかという、ザスーリチが回答をもとめてきた係争問題を、『資本論』の問題設定をこえている問題として把握する⁴⁾。

マルクスは1867年に『資本論』第1部を刊行して以降、ロシア社会論に取り組むなかでこの『資本論』をこえる問題に出会い、その理論化につとめてきたのである。さきに引用したフランス語版『資本論』が1875年の時点におけるその中間報告であるとすれば、1881年の2月から3月にかけて執筆された「ザスーリチへの手紙」はその最終報告である⁵⁾。「私はこの問題について特殊研究をおこない、しかもその素材を原資料のなかに求めたのですが、その結果として、次のことを確信するようになりました。すなわち、この共同体はロシアにおける社会的再生の拠点であるが、それがそのようなものとして機能しうするためには、まずはじめに、あらゆる側面からこの共同体におそいかかっている有害な諸影響を除去すること、ついで自然発生的発展の正常な諸条件をこの共同体に確保することが必要であろう、と」⁶⁾。しかし、この手紙は結論のみを示しているだけであって、「特殊研究」の方法も、共同体が解体を免れ、社会再生の拠点として発展するという論理も知ることはできない。マルクスは、この手紙の4つの草稿の中でこの論理を試行的に展開し、『資本論』の問題設定をこえる問題を理論化するための方法を呈示しようとしたのである。同時にまたその結果として、『資本論』と晩年のロシア社会論の関連をどのように理解すべ

3) Ar. S. 341, (19) 238ページ。

4) マルクス研究における「ザスーリチへの手紙」とその草稿の意義については、平田清明「歴史的必然と歴史的選択」(『展望』1971年, 10, 11, 12月号, 『新しい歴史形成への模索』新地書房, 1982年, 所収)を参照。

5) 和田春樹『マルクス=エンゲルスと革命ロシア』, 勁草書房, 1975年, 64ページ, 165ページを参照のこと。

6) Ar. S. 341~342, (19) 239ページ。

きか、というもうひとつの「カール・マルクス問題」⁷⁾が提起されることになったのである。

戦後における日本のマルクス研究は、『資本論』第1部刊行100年をむかえた1967年以後の数年間にもっとも充実した収穫期を経過したと思われるが、山之内靖の『イギリス産業革命の史的分析』と『マルクス・エンゲルスの世界史像』、田中真晴『ロシア経済思想史の研究』、福富正美『共同体論争と所有の原理』、本多健吉『低開発経済論の構造』、淡路憲治『マルクスの後進国革命像』、平田清明『経済学と歴史認識』などの、つぎつぎとこの時期に発表されたマルクス研究は、「ザスーリチへの手紙」とその草稿をマルクスの理論的到達点として理解し、ここにマルクス研究の軸点のひとつをおいているのである。これらの研究の特徴は、「歴史認識と後進国問題」⁸⁾の視角から晩年のマルクスに照明をあてたことである。すなわち、山之内や淡路の研究は、ロシア社会論の展開を通じて後進資本主義の類型認識や特殊性把握の問題と理論的に苦闘し、『資本論』をこえる問題を理論化する方法を開拓しつつあるマルクス像を描きだしたのである。しかし、問題は類型認識または特殊性把握の方法である。山之内は『資本論』の本源の蓄積論をその一般的規定として位置づけたうえで、マルクスのロシア社会論を本源の蓄積の特殊類型の把握として規定する。氏は本源の蓄積論を類型認識の方法として用いるのである⁹⁾。これにたいして淡路は、世界市場で中心国＝先進国との対応をせまられる後進国発展の特殊性に着目する視角から、資本主義の類型性を明らかにしようとする。淡路は、先進国との関連における後進国発展の独自性という段階論的な視点を類型認識の方法として用いているのである¹⁰⁾。とはいえ、両者は方法的視角を異にするとはいえず、ともに後進資本主義分析という問題設定において、『資本論』をこえる問

7) 望月清司「カール・マルクス問題」、森田桐郎ほか『マルクス』有斐閣、1982年を参照のこと。

8) 山田鋭夫「日本のマルクス経済学の現段階」『経済評論』1978年11月号、84ページ。

9) 山之内靖『マルクス・エンゲルスの世界史像』未来社、1969年、266ページを参照。

10) 淡路憲治『マルクスの後進国革命像』未来社、1971年、11-12ページを参照。

題群を類型論的認識によって理論化しようとしているということができる。

本稿は両氏によって後進資本主義分析の視角から検討された「ザスーリチへの手紙」とその草稿を周辺資本主義分析の視角から検討しようとするものである。晩年のマルクスは1980年代の今日、このような視角から再検討されるべき時期をむかえているからである。

第1に、近年のネオ・マルクス主義と呼ばれる低開発分析は、先進国と後進国とを対比させるのではなく、サミール・アミンの世界的規模での資本蓄積論にみられるように、中心資本主義と周辺資本主義とを対立的に規定する。その場合彼は、周辺部から中心部への価値移転を本源的蓄積の現代的形態として規定し、これによって周辺部の「低開発の発展」を説明する。また彼は、資本制的生産が周辺部では支配的になるが専一的になりえず、前資本制的生産様式が「残存」する理由を、世界市場において先進国と競合し外部市場にもとづいて資本主義化をとげなければならない後進国発展の困難性にもとめる¹¹⁾。彼は、低開発分析のために、本源的蓄積論的な視角と段階論的な視角とを並用しているのだが、彼の理論のなかでこの2つの視角は体系的な関連をもたないまま、無造作に並存しているにすぎない。しかし、日本のマルクス研究では後進国問題を分析するために用いられた方法が、ネオ・マルクス主義者と呼ばれる人びとによって低開発問題または周辺資本主義分析のために用いられていることを確認することは重要である。というのは、アミンやフランクなどの、従属学派と呼ばれる理論潮流が日本に紹介され受容されるさい、ともすればそのラディカルな問題意識だけが共感または反感を呼んだだけで、その分析装置が『資本論』の原理的法則や晩年のマルクスの類型認識との関連で検討されることは意外に少ないからである。マルクス研究における後進資本主義分析と周辺資本主義分析とは、分離されたままなのである¹²⁾。晩年のマルクスを周辺資本主義分

11) サミール・アミン、野口祐ほか訳『世界資本蓄積論』柘植書房、1979年、66～68ページを参照。

12) 毛利健三『自由貿易帝国主義』（東京大学出版会、1978年）は、「イギリス産業資本の

析の視角から検討することは、本稿「Ⅱ、『ザスーリチへの手紙』の草稿と周辺資本主義分析」でみるように、このような研究史上の切断を埋める意味をもつものと考えられるのである。

第2に、晩年のマルクスと従属理論または周辺派経済学との問題関心の共通性がこれまで度々指摘されながら、ロシア社会論を周辺資本主義の視角から検討した研究はきわめて少ないのである。この視角から最初に「ザスーリチへの手紙」に注目したのは、レイの『階級同盟』¹³⁾である。彼はこの書物の中で、中心部における資本主義発展と、非封建的な生産様式が支配する周辺部にたいする資本主義の浸透＝普及とを同時に説明できる生産様式接合の理論を構想し、とくに非ヨーロッパ諸国における資本制的生産が国家権力（帝国主義）によって移植され、資本制的生産様式が非封建的な前資本制的生産様式との強制的な接合過程を通じて確立されることを理論化しようとしているのだが、彼の問題意識の出発点は、「ザスーリチへの手紙」の中でマルクスが『資本論』の適用範囲を西ヨーロッパに限定していることにあった。彼の接合理論は、本源的蓄積の一般規定とその特殊類型とを統一的に理解するひとつの試みであるといってもよいだろう。しかし彼は、不思議なことに、「ザスーリチへの手紙」の草稿の本格的な検討をしないままに、晩年のマルクスにおける接合理論の不在を確認し、『資本論』を生産様式接合の理論として読みかえる作業をおこなったのである。したがって、「ザスーリチへの手紙」とその草稿を周辺資本主

世界展開が、後進資本主義諸国ならびにいつそう後進的な辺境世界の発展に、どのような影響を与えたか」（Vページ）という視角から「マルクスと『低開発』」（80～117ページ）の問題を検討し、研究における空白を埋めようとした先駆的な研究である。しかし、アイルランド問題を論じたマルクス（1867年12月16日）と最晩年のマルクスの到達点とのあいだには、歴史認識における質的な深化があるように思われる。山本啓「マルクスと世界認識のパラダイム」（『思想』1983年3月号）を参照。

- 13) Pierre-Philippe Rey, *Les alliances de classes*, Maspero, 1973. なお、レイの生産様式接合の理論については、山崎カヲル「生産様式の節合と帝国主義の理論」（『季刊クライシス』第5号）、拙稿「資本循環論と生産様式接合の理論」（関西大学『経済論集』第32巻第1号）を参照。

義の視角から本格的に検討する研究は、シャーニン編の近著『晩年のマルクスとロシアの道』¹⁴⁾をもって始まったといっても過言ではない。この書物は、「マルクスと資本主義の周辺部」という副題が示すように、「ザスーリチへの手紙」とその4つの草稿を英語文献としてははじめて紹介すると同時に、晩年のマルクスを従属理論の問題意識で読むことを提唱する。

シャーニンは、従属理論をネオ・マルクス主義と呼ぶのはあやまりであり、むしろそれは「マルクスのマルクス主義」¹⁵⁾を継承するものである、と考える。彼によれば、大切なことはアルチュセールのように『資本論』を読みことではなく、『資本論』をもっとも重要なエレメントとして含んでいるマルクスそのひとを読むことなのである。本稿はとくに「Ⅲ、ロシア社会論における接合理論と階級闘争」で検討するように、このシャーニンの問題提起に共鳴し、方法論的にはレイの接合理論を用いて晩年のマルクスを再検討しようとする試みである。レイは接合理論と階級闘争との関連を強調するが、マルクスの中には両者の不在を確認するのみである。晩年のマルクスが問題に触れながらそれを理論化で同じかった理由は、レイによれば、マルクスがイギリスの運動にかかわったのときのような結びつきをロシアの農民運動にたいしてもちえなかったからである¹⁶⁾。したがって、レイの接合理論を晩年のマルクスのロシア社会論に適用するうえで、ロシアの農民運動の視角から「ザスーリチへの手紙」草稿に照明をあてた、和田春樹や日南田静真の研究が重要な示唆をあたえているのである¹⁷⁾。

第3に、晩年のマルクスと従属理論との共通性が強調されればされるほど、『資本論』のマルクスと晩年のマルクスとの落差が開いてしまうという問題がある。望月清司がマルクス没後100年をむかえた1983年に執筆されたマルクス

14) Teodor Shanin(ed), Late Marx and the Russian Road, Routledge & Kegan Paul, 1983.

15) Ibid., p. 273.

16) P.—P. Rey, op cit., p. 178.

17) 和田春樹, 前掲書, Shizuma Hinada, On the meaning in our time of the drafts of Marx's letter to Vera Zasulich (1881), 『スラヴ研究』第20号を参照。

研究のうちで、マルクスを西欧中心主義者として取り扱っている諸論文を批判的に検討しながら指摘しているように、従属理論に共感する人びとがマルクスを守るために晩年のマルクスを持ち上げれば上げるほど、『資本論』段階までのマルクスをことさらに西欧中心主義者ないしは単線的歴史観の持ち主として描きだすというジレンマに陥ってしまうのである¹⁸⁾。とするならば、『資本論』と晩年のマルクスとの関係はどのように理解すべきであろうか。『資本論』を、否「マルクスのマルクス主義」を従属理論との関連で再検討しようとする新しいマルクス研究もまた、従来の後進資本主義分析という問題設定がかかえていたのと同じような方法論的問題に直面しているのである。本稿の「IV、結びにかえて——類型的認識から歴史理論へ——」は、この方法論上の問題についての予備的考察である。

II 「ザスーリチへの手紙」の草稿と周辺資本主義分析

「ザスーリチへの手紙」とその4つの草稿は、周知のように、ロシア資本主義を「国家の仲介によって、農民の負担で養われているある型の資本主義 *un certain genre de capitalisme*」¹⁹⁾と規定する。この資本主義規定はこれまで多数の研究者の注目をひき、後進資本主義の類型的特質を把握するための特殊規定として理解されてきた。この場合、マルクスのロシア社会論に見られる資本主義把握は、「上から」の道を経過するドイツ資本主義と基本的には同じ型の資本主義分析を深化させ確立させたものとして受けとめられてきた。例えば、『マルクス・エンゲルスの世界史像』は、晩年のマルクスの理論的営為のうちに資本主義の類型的認識の成立を読み取った画期的な研究であるが、この書物の構成が「第7章 資本主義発展の『上から』の道——その1, ドイツ——」, 「第8章 資本主義発展の『上から』の道——その2, ロシ

18) 望月清司「『資本の文明化作用』をめぐる」『経済学論集』（東大），第49巻第3号を参照。

19) Ar. S. 334, (19) 403ページ。

ア——」となっていることから知られるように、山之内靖は「ザスーリチへの手紙」草稿を後進資本主義分析の視角から検討する。山之内によれば、この手紙のマルクスは、「ロシア資本主義形成史の最も核心的な部分、つまりはロシアにおける本源的蓄積過程の特殊性解明という作業」²⁰⁾をおこない、「ドイツの場合と同じく、いやそれにもましてロシアの場合には、この特殊類型の資本主義はツァーリ専制国家の半農奴制的財政機構を抜きにしては成立し得なかった」²¹⁾ことを明らかにしたのである。たしかに、ここでマルクスは、国家という政治的上部構造の決定的な役割を強調し、国家に仲介された資本制的生産の確立過程を分析しているのであるから、このロシア資本主義論の展開の中に類型論的認識の成立を汲み取ることが可能である。すなわち、氏によれば、後進資本主義分析の方法としての類型認識とは、『『上から』の道をたどった後進資本主義において、一般法則はどのような媒介された姿態をとってあらわれるか』を問う視角であり、何よりも後進資本主義における資本関係形成の特殊性を「西ヨーロッパとは異なる本源的蓄積の特殊類型として理論化」する方法的意識である²²⁾。

しかし、ロシアにおける「上から」の資本主義発展は、同時に「外から」移植された資本制的生産の定着過程であり、「西洋が数世紀かかってやっと作りあげた(銀行や信用組合などの)交換機構を、いわば数日のうちに自国に導入することに……成功した」²³⁾資本主義化でもある。第1草稿、第2草稿の冒頭部分は、「上から」の契機よりもむしろ「外から」の契機を強調しているのである。そして、この「外から」の契機に着目して、晩年のマルクスにおける類型認識の成立をクローズ・アップさせたのが、淡路憲治『マルクスの後進国革命象』である。淡路は「後進国発展のコース・型・特殊性は、……資本主義の世

20) 山之内靖、前掲書、266ページ。

21) 同上書、270ページ。

22) 同上書、227ページ。

23) Ar. S. 332. (19) 401ページ。

界市場の中における、先進国との関係における後進国の位置づけゆえに、本来、先進国の場合とは異なる特殊な発展の論理をもつ」²⁴⁾ことを強調するために、後進国発展を先進国＝「典型としての資本主義」の発展に還元してしまう「単一的発展像」と、後進国発展の特殊化に着目する「複合的発展像」とを区別し、『資本論』段階（1867年）から晩年のロシア社会論にいたるマルクス後進国認識の推移を、単一的発展像から複合的発展像への転回として把握する。氏が「ザスーリチへの手紙」草稿の論点を「A、西欧資本主義との同時並存関係」、「B 農村共同体の歴史的位置づけ」、「C、農村共同体の現状」の3つに分け、「資本主義的生産の支配する世界市場において、資本主義的西欧世界と同時的並存関係にあることによって、後進国ロシアは、先進資本主義国において漸次的連続的發展の結果として到達した資本主義制度のある部分を、一挙に導入しうる可能性のあること」²⁵⁾から分析を開始しているように、氏のマルクスロシア社会論解釈の特徴は、先進・後進国関係という「外から」の契機の強調にある。さらにくわえて、氏は1879年4月10日付の「マルクスのダニエルソンへの手紙」を援用しながら、鉄道、銀行、取引所などの「資本主義的上部構造」が西欧の先進国からロシアという「前資本主義的非西欧世界」に移植され、「接穂」されたものであることを随所で強調する²⁶⁾。ここでの後進資本主義規定、すなわち、西欧的世界から非西欧的世界に「移植」され「接穂」された資本主義という把握は、すでに後進国発展像の分析という問題設定をこえて、周辺資本主義の発展像を描写している、といってよいほどである。あるいは、氏は晩年のマルクスのロシア社会論の中に、事実上、後進資本主義分析と周辺資本主義分析とを同時に読み取り、「従属理論」と呼ばれる低開発分析の新潮流をマルクスに即して理解する理論的基礎を用意しているのである。

ネオ・マルクス主義とも呼ばれ従属学派は、「世界資本主義」を中心部の視

24) 淡路憲治，前掲書，11～12ページ。

25) 同上書，209ページ。

26) 同上書，270ページ。

点からではなく、周辺部の視点から周辺における「低開発」を批判的に解明するために分析する。再びサミール・アミンの世界資本蓄積論を例にとっていえば、彼は「世界資本主義」を「中心資本主義」と「周辺資本主義」とに二分し前者の「発展」と後者の「低開発」との対立的な関係を究明するにさいし、『資本論』の妥当範囲を中心部の資本主義に限定し、周辺部の資本主義分析の方法を独自に検討する²⁷⁾。彼はこの方法を、『資本論』の本源的蓄積論の現代化（いわば、非西欧的原蓄論の提起）によって²⁸⁾、あるいは、レイの生産様式接合の理論の適用を通じて創造しようとする。しかしアミンは、晩年のマルクスのロシア社会論を検討しないままに、周辺資本主義論を構築するのに急である。レイもまた、後にみるように「ザスーリチへの手紙」には注目するものの、この手紙の草稿を検討しないままに、『資本論』をこえる問題をとらえるために『資本論』を生産様式接合の理論として再構成する作業をおこなっている。このように、晩年のマルクスと従属理論との関係は、これまで本格的に議論されたことはないのである。

この研究史上の空白を埋めたのが、すでに紹介したように、シャーニン編の『晩年のマルクスとロシアの道』であって、彼は従属理論の提起する周辺資本主義分析の視角からマルクスのロシア社会論に照明をあてたのである。シャーニンは巻頭論文「晩年のマルクス」の中で、1881年のマルクスの眼にとらえられたロシア社会像は、現代の用語で言い直すならば“発展途上にある”社会ないし「周辺資本主義」社会と規定しうるものであり、マルクスがやがては20世紀最大の問題になる「新しいタイプの社会現象」の「最初のシルエット」とをといえたと考える²⁹⁾。彼によれば、このような周辺部的な視角にたつことによつてのみ、最晩年のマルクスが提起した諸論点を完全に現代的な文脈で考察する

27) サミール・アミン、山崎カヲル訳「蓄積と発展——ひとつの理論モデル」（『インパクト』第3号、1979年）を参照。なお、アミンの『資本論』理解の特徴と問題点については、拙稿「資本の国際化の経済学批判」（『経済評論』1980年3月号）を参照。

28) 望月清司「第三世界研究と本源的蓄積論」『経済評論』1981年12月号を参照。

29) Teodor, Shanin, op. cit., pp. 17~20.

ことができるのである。シャーニン論文は「ザスーリチへの手紙」の草稿を詳しく検討しているわけではないが、マルクス研究における後進資本主義分析から周辺資本主義分析への転換を呼びかけているのである。

シャーニンの問題提起は、いわば“コロンブスの卵”のようなものであって、そう言われてみるならば、「ザスーリチへの手紙」の草稿はロシア資本主義を「上から」の道をたどる後進資本主義としてよりもむしろ——このこと自体は否定しがたいが——、資本主義的世界体制の周辺部に位置づけ、その周辺の性格を分析しているのである。「国家の仲介によって、農民の負担で養われているある型の資本主義」とは、周辺資本主義の基本規定ではないだろうか。

マルクスは、ロシア社会をインド社会と同じように、「資本制的生産の支配している世界市場」³⁰⁾の周辺部に位置づけている。彼は両者を周辺資本主義という共通の規定性でおさえているために、逆に両者の相違点を強調するのである。マルクスがこの相違点を強調しているのに目を奪われて、ロシア資本主義分析を「上から」の道をたどるドイツ型の後進資本主義にひきつけて理解してはならない。「ロシアは、東インドのように外国の征服者の餌食でもない」³¹⁾。したがって、国家という政治的上部構造は植民地国家とは異なる規定をもっているが、ロシアもインドも基本的には周辺資本主義の規定性を帯びているのである。また、ロシアでは「共同体的所有が広大な、全国的な規模で維持され」³²⁾、この「共同体」を搾取し利用することによって「資本主義的上部構造」が創出されたのにたいし、「東インドを例にしていうと、……そこでは土地の共同所有の廃止が、原住民を前進させないで後退させるイギリスの文化破壊行為でしかなかった」³³⁾という違いがあるものの、国家権力が「共同体」を温存したり解体したりしながら資本主義を移植するという点では、ロシアもインドも周辺

30) Ar. S. 332, (19) 401ページ。

31) Ar. S. 319, (19) 387ページ。

32) Ar. S. 332, (19) 401ページ。

33) Ar. S. 335, (19) 405ページ。

性という共通の質的規定を有するのである。

ここで、シャーニンには欠けている生産様式接合理論の視角から、ドイツ型の後進資本主義とロシア型の周辺資本主義との決定的な違いがどこにあるか、を検討しよう。周辺資本主義の基本的なメルクマールは、資本制的生産が支配する世界市場の周辺に位置する非ヨーロッパ的世界に、資本制的生産が外部から移植され、確立されなければならないということである。そして、第2のメルクマールは、資本制的生産が根をおろし支配を確立する過程において、国家という政治的な決定力が主導的な役割を果し、「共同体」のような非資本制的関係を資本主義発展に必要なかぎり温存し利用することである。すなわち、国家の介入＝仲介によって資本制的生産と「共同体」とが接合する局面を通じて、資本制的生産は定着し、その支配を確立するのである。このような眼で「ザスーリチへの手紙」の下書きを再検討するならば、マルクスが資本制的生産の外部からの「移植」を表現するために、*naturaliser*, *implanter*, *domicilier*, *acclimater* などの用語を用い、ロシアにおける資本主義発展の周辺の性格を強調していることに気づくのである³⁴⁾。彼はまた国家が経済的社会形成の主体として機能し、取引所、投機、株式会社、鉄道などの資本主義制度を移植させる事態を批判的に敘述し、これらの制度を人体に寄生する「いぼ」や「こぶ」になぞらえて「肉腫 *excroissance*」として特徴づけ、ロシア資本主義の周辺の性格を浮き彫りにしているのである³⁵⁾。そしてさらに、「低開発の発展」と

34) 参照。「彼らは、資本制的生産を彼らの国に移植する *naturaliser* ことを望んでおり、したがって、当然に、農民の大多数をたんなる賃金労働者に転化させることを望んでいるのである」(Ar. S. 330, (19) 399ページ)。「国家は、資本主義制度の肉腫のうちで最も移植 *acclimater* しやすいもの……を、あたかも温室におけるがごとくに育てあげた」(Ar. S. 327, (19) 396ページ)。

35) 周辺資本主義における市民社会と国家との関係、すなわちそこでは、国家形成を通じて市民社会的要素が肉腫のように形成されることについては、次の文献を参照。
Kostas Vergopoulos, *L'Etat dans le capitalisme périphérique*, *Revue Tiers Monde*, Janvier-Mars, 1983. 拙稿「接合理論の展望」『経済評論』1984年2月号。

いう従属理論の問題意識で「ザスーリチへの手紙」の草稿を読むならば、マルクスは一方で資本制的生産が「共同体」の発展能力を奪うことによって発展し、その支配を確立しつつあること、すなわち、広大なロシア社会の内部における「発展」と「低開発」との対立的な関係を批判的に把握し³⁶⁾、他方で、実務家的な視野には入ってこないような「農耕共同体」の発展可能性を世界史的視座から検出し、「共同体」の解体を歴史的宿命とみなす見解を非難するのである。そして最後に、マルクスの数ある著作、論文、手紙、草稿などの中で、これほど発展 *développement* という用語が集中的に使われた文献は他に例がないのである。

以上をまとめるならば、次のように言うことができる。「国家の仲介によって、農民の負担で養われているある型の資本主義」とは、何よりも、外部から移植された資本主義であることが忘れられてはならない。したがって、マルクスによって把握された周辺資本主義を後論での展開をも先取りして示すならば、(1)非西欧の世界に外部から移植された資本制的生産、(2)国家権力の仲介による資本制的生産様式と非（=前）資本制的な「共同体」との強制的な接合、(3)この接合過程における2局面——「共同体」の温存局面とその解体局面——、(4)支配階級の権力ブロック＝階級同盟と農民層の抵抗＝農民運動との基本的対抗関係、として規定することができる。「ザスーリチへの手紙」の草稿は、ロシア資本主義の特殊性を、資本制的生産と「遅れた」前近代的な共同体との並存またはたんなる二重性にもとめてはいないのである。

36) 参照。「……その最大の部分が農民の負担と失費において支払われた巨額の公債、および資本家に……供与されたその他の莫大な金額——これらの支出がすべて農村共同体のいっそうの発展 *développement ultérieur* のために使われていたなら、その場合には、だれも今日、共同体滅亡の『歴史的宿命性』を夢みはしなかったであろう」(Ar. S. 319, (19) 387ページ)。

Ⅲ ロシア社会論における接合理論と階級闘争

「ザスーリチへの手紙」の下書きは、日南田が指摘するように、第2草稿、第1草稿、第3草稿、第4草稿の順序で執筆されたと思われる³⁷⁾。マルクスは、それぞれ強調点を異にしているこれらの草稿の中で、「ロシアの共同体の構造上の形態とその歴史的環境とがそれにあたえているその発展可能性」³⁸⁾と「ロシアの共同体を〈現在〉苦しめている悲惨事」³⁹⁾とを分析することによって、すなわち、ロシアの「共同体的所有」がおかれている世界史的な環境と、ロシア社会の対立的性格の分析によって、ロシアの「農耕共同体」が社会の再形成における拠点として機能しうることが論証しようとする。彼は、この歴史的環境論によって、「共同体的所有は、西ヨーロッパのいたるところに存在したが、社会進歩とともにどこでも消滅した。どうしてそれは、ロシアでは同じ運命をまねかれうるのであるか？」という「共同体的所有の宿命的な解体に賛成する側のまじめな証拠」を批判しようとする⁴⁰⁾。そして、ロシア社会における、「共同体」の発展と資本制生産の確立との対立的関係を明らかにすることによって、彼は資本家階級という「社会の新たな柱石たち」のイデオロギーが「共同体にくわえられた傷をつかまえて、それは……共同体の自然的な老朽の徴候である」⁴¹⁾というのを批判しようとする。いずれにせよマルクスは全力を挙げて共同体解体を歴史の必然性とみなす見解を非難し、共同体の発展の理論的可能性を顕在化させると同時に、その発展可能性を奪っている「国家による抑圧」と「この同じ国家が農民の負担と失費によって強大にしてきた資本主義的侵入者による搾取」を批判的に分析する⁴²⁾。

37) 福富正美「B・N・ザスーリチの手紙への回答およびその下書」にたいする日南田静真の「コメント」(『マルクス・コメンタールV』現代の理論社、1973年)を参照。

38) Ar. S. 338, (19) 408ページ。

39) Ar. S. 338, (19) 408ページ。

40) Ar. S. 331, (19) 400ページ。

41) Ar. S. 329, (19) 398ページ。

42) Ar. S. 334, (19) 403ページ。

彼は最初に第2草稿において、『資本論』の本源の蓄積論の妥当範囲を西ヨーロッパに限定したうえで、諸階級の同盟と闘争がそこにおいておこなわれている「ロシア社会」と、この社会形成の舞台となる「歴史的環境」とを分析する。ロシアにおける社会形成は、ロシアが「共同体的所有が広大な、全国的な規模で維持されている、ヨーロッパで唯一の国」であり、しかも同時にロシアが「近代の歴史的環境のうちに存在し、……資本制的生産の支配している世界市場に結びつけられている」⁴³⁾という条件のもとでおこなわれる。そこでは、「上から」の契機によって、資本制的生産が西ヨーロッパから移植されることもできるし、他方ではまた、資本制的生産の確立を経ることなくその肯定的な成果をわがものとし、「共同体」を社会再生の要素として発展させることもできるのである。「ザスーリチへの手紙」の草稿はこのように冒頭部分から、たんなる経済決定論な分析でも、歴史の客観的法則にもたれかかる分析でもなく、「主体論的歴史分析」⁴⁴⁾といってもよい性格を有している。マルクスはこのような視角から、この第2草稿において、つづいて、ロシア共同体の構造上の特質を分析し、さらに共同体の発展可能性を奪ってきた国家と支配階級の抑圧と搾取をするべく批判する。すなわち、歴史的環境論、「農耕共同体論」、ロシア社会論の三者が一体となって、新しい社会形成の理論の骨格を成しているのである⁴⁵⁾。

第1草稿の特徴は、歴史的環境によって支えられているロシアの「農耕共同体」の発展の理論的可能性を鮮明にするために、農耕共同体論とロシア社会論とを切り離し、両者を思いきりふくらませて議論していることである。マルクスは、『農耕共同体』を苦しめているすべての悲惨事を問題外にして……この共同体の構造上の形態とその歴史的環境との双方が……許容している今後の発

43) Ar. S. 332, (19) 401ページ。

44) 山之内靖，前掲書，ixページ。

45) 4つの草稿の主要な論理については、平田清明「歴史的必然と歴史的選択」（前掲書，所収），淡路憲治「晩年のマルクスのロシア像」（前掲書，所収）を参照。

展の能力のみを考察する」⁴⁶⁾ という方法によってロシア社会論を捨象して、世界史における選択可能性の理論、すなわち『農耕共同体』にふくまれている私的所有の要素が集团的要素に打ち勝つか、それとも後者が前者に打ち勝つか。すべては、それがおかれているこの歴史的環境に依存するのである」⁴⁷⁾ という視角から、農耕共同体の発展可能性を論証しようとするのである。しかし農耕共同体は、そこにおいて諸階級の対立と同盟とが争われるロシア社会から離れて存在するのではない。共同体は移植され確立されつつある資本制的生産と密接な関係をもっている。マルクスは、後に詳しく述べるように、この論点をロシア社会論としてかなりまとまった形で展開し、第1草稿を、「ロシアの共同体を救うには、ひとつのロシア革命が必要である」⁴⁸⁾ という考えによって結ぶのである。第1草稿は、『資本論』の西ヨーロッパへの方法的限定、歴史的環境論、農耕共同体の歴史的位置づけとそれ固有の二重性、ロシア共同体の発展の理論的可能性、諸階級論としてのロシア社会論というすべての論点を含み、それらを展開しようとしている。

しかし第3草稿は、諸階級の対立を通じての歴史形成というロシア社会論をほぼスッポリと切り落とし、人類史における農耕共同体の位置づけに叙述の大半をさき、ロシア共同体の今後の発展可能性については集約的に叙述するのみである。とはいえ、マルクスは「ザスーリチへの手紙」の下書きを準備する過程で、ロシア社会論を軽視したり、あるいはその理論展開の未熟性を自覚したために、次第に農耕共同体の世界史的位置づけを重視するようになった、ということではできないであろう。歴史的環境論、農耕共同体論、ロシア社会論の論理が一体となってはじめて、共同体の解体を歴史的宿命とみなす見解を批判し、新しい歴史形成の論理を提起しうからである。「ザスーリチへの手紙」の本文も、これにきわめて類似している第4草稿も、共同体がロシア社会を再形成

46) Ar. S. 323, (19) 391ページ。

47) Ar. S. 323, (19) 391ページ。

48) Ar. S. 329, (19) 398ページ。

するための拠点として機能するためには、「あらゆる側面からこの共同体におそいかかっている有害な諸影響を除去すること、ついで自然発生的発展の正常な諸条件をこの共同体に確保することが必要であろう」⁴⁹⁾と述べているように、ロシア社会論抜きには、歴史形成を語ることができないからである。以下、第1草稿を中心にして、マルクスの新しい社会形成論のかなめのひとつを成しているロシア社会論を、諸階級の対立と同盟という視角から検討しよう。

すでに指摘したようにロシア社会では、二つの選択可能性が争われている。一つは、国家と「資本主義制度の愛好者たち」が選んでいる道であり、「共同体」を最終的に解体して、資本制的生産の支配を確立する道である。もう一つは、全国的な規模で維持されている共同体の所有と資本制的生産の肯定的成果とを組み合わせる道である。マルクスは、第2草稿の末尾で、二つの歴史的発展の選択をめぐるロシア社会の二者闘争的性格をつぎのようにのべている。

「今日ロシアの共同体の存在そのものが、強力な利権屋たちの陰謀によっておびやかされているということを、あなたにいまさら言う必要はない。国家の仲介によって、農民の負担で養われているある型の資本主義が、共同体に相対峙している。この資本主義にとっては、共同体を押しつぶすことが利益なのである。……ロシアの共同体の生活をおびやかしているもの、それは、歴史的宿命性でもなければ、理論でもない。それは、国家による抑圧であり、また、この同じ国家が農民の負担と失費において強大にしてきた資本主義的侵入者による搾取である」⁵⁰⁾。

ここには、第1草稿で展開されることになるロシア社会論の端初がみられる。とくに、「国家の仲介によって、農民の負担で養われているある型の資本主義」が、支配的諸階級の階級同盟としてつかまえられていることが重要である。「多少とも生活にゆとりある農民を中農階級に仕立て上げ、そして貧しい耕作者——すなわち大多数——をたんなる賃金労働者に転化することは、地主

49) Ar. S. 324, (19) 239ページ。

50) Ar. S. 334, (19) 403ページ。

の利益なのである。……国家の＜租税の＞きびしい取り立てによって打ちひしがれ、商業によって略奪され、地主によって搾取され、高利によって内部から掘りくずされた共同体が、どうしてこれに抵抗できるであろうか」⁵¹⁾。マルクスはこのように支配階級の階級同盟または権力ブロックが成立し、これが共同体におそいかかっていること、いわば支配階級のロシア最大の生産力である農民にたいする階級闘争を批判的に明らかにしようとするのである。この階級同盟と階級闘争という視角は、次にみるように、第1草稿においてよりいっそう詳しく展開されている。

(1) 階級同盟

マルクスは、ロシア共同体が「強力な勢力や利権屋たちの陰謀に今日直面していること」⁵²⁾をなんども指摘しながら、「ロシア最大の生産力たる耕作者たちの搾取を容易にし促迫しているこれら敵対的な諸勢力がたがいに協力していること」⁵³⁾、すなわち、資本制的生産を確立するための階級同盟に着目する。この階級同盟によって、ロシアの共同体はその存在自体が危機にある。共同体はその内部から解体しはじめている。マルクスは第1草稿において、第2草稿末尾の階級同盟論をつぎのように詳しく言い直している。「国家の直接の取り立てによって押しつぶされ、資本家や商人などの侵入者や土地『所有者』によって詐欺的に搾取されているロシアの共同体は、そのうえさらに、村の高利貸しによって、また周囲につくりだされた状況が共同体そのものの内部に＜引きおこした＞利害の衝突によって、掘りくずされている」⁵⁴⁾。

(2) 階級同盟または接合の諸段階

しかしいま問題なのは、この階級同盟によって、資本家、商人、高利貸し、土地所有者などの支配階級がこれまで「農村共同体の現状でばろ儲けしていな

51) Ar. S. 334, (19) 403ページ。

52) Ar. S. 326, (19) 395ページ。

53) Ar. S. 327, (19) 397ページ。

54) Ar. S. 326—327, (19) 396ページ。

がら、なぜ金の卵を生んでくれる牝鶏をことさらに殺そうとたくらむのだろうか」⁵⁵⁾ということである。「こんなにも多くのさまざまな利権屋たち、なかでもアレクサンドル二世の情けぶかい帝国のもとで『社会の新たな柱石』に昇格させられた利権屋たちは、『農村共同体』の現状で儲けてきたのに、なぜことさらにその死をたくらむようになるのであろうか？」⁵⁶⁾。マルクスは、このように、「農村共同体」をこれまで温存し、資本主義を移植するのに利用してきたにもかかわらず、今や、資本制的生産のよりいっそうの発展のために、共同体を解体する局面を迎えていることを見事にとらえている。すなわち、支配階級の階級同盟は、ロシア農民および農村共同体との新しい接合の様式を求めているのである。「それはただ、経済的諸事実(資本制的生産と共同体との接合として読もう……若森)……が、共同体の現状はもはや維持しがたいという秘密を、また、人民大衆を搾取する現在の様式は事物の必然性だけによってやがて時代おくれになるであろうという秘密を、明るみに出したからにすぎない。そこでは新しいやり方が必要となるわけだ。この新しいものとは、……つねに次のことに帰着する。すなわち、それは、共同所有を廃止し、……大多数の農民をただのプロレタリアに転化することである」⁵⁷⁾。マルクスは、レイの接合理論で言い直すならば、資本制的生産は、共同体を一度に全面的に解体するのではなく、共同体を解体すると同時にそれを必要な限りで温存＝利用することを明確に把握しているのである。ロシアにおける資本主義は、国家の仲介によって資本制的生産と「共同体」とが強制的に接合されながら発展してきたのであるが、この接合は二つの局面を経過するのである。資本制的生産が階級同盟によって共同体を解体し、その支配を確立しようとするのが接合の第二局面であるとすれば、接合の第一局面は、マルクスによって次のように詳しく叙述されている。

「いわゆる農民解放以来、ロシアの共同体は、国家によって異常な経済的諸条

55) Ar. S. 328, (19) 397ページ。

56) Ar. S. 328, (19) 397ページ。

57) Ar. S. 328, (19) 397～398ページ。

件のもとにおかれた。そしてそのとき以来、国家はその手に集中された社会的諸力によって、たえず共同体をさいなみつづけてきた。……〈農民の負担と失費において、国家は、資本主義制度の肉腫のうちで最も移植しやすいもの、すなわち、取引所、投機、銀行、株式会社、鉄道を、あたかも温室におけるがごとくに育てあげた。国家はそれらの事業の赤字を埋めてやり、しかもそれらの事業の利潤はその企業家たちがポケットに入れるがままにさせている。……このようにして国家は、そうでなくともひどく貧血している『農村共同体』の血をすすす新たな資本主義的寄生虫を富ませることに協力したのである〉。……一言で言えば、国家は、耕作者すなわちロシア最大の生産力の搾取を容易にし促進するうえで、かつまた『社会の新たな柱石たち』を富裕にするうえで最も適合した、技術的ならびに経済的諸手段の早熟な発展に〔仲介者としてすすんで〕力を貸したのである」⁵⁸⁾。この文章は、資本主義発展の上からの道として読むこともできるが、マルクスがここで共同体を“前近代的で遅れている経済的諸関係”として性格規定していないことに注意しなければならない。彼は、「資本主義的寄生虫」が国家権力の仲介によって「共同体」と接合し、最大の生産力である農民の負担によって「資本主義制度の肉腫」が移植される局面を理論化しようとしているのである。

(3) ロシア革命と農民革命

マルクスは第1部草稿の最終パラグラフで、共同所有を廃止し共同体の農民をプロレタリアに転化しようとする権力ブロックの陰謀にたいして、周知のように、「ロシアの共同体を救うには一つのロシア革命が必要である」⁵⁹⁾とのべ、つぎのように断言する。「ここではもはや、ある課題を解決することが問題なのではなくて、ただ敵を打倒することだけが問題なのである。〈だから、それはもはや理論的な問題ではない〉。ロシアの共同体を救うには、一つのロシア革命が必要である。……もしも革命が適時に起こるならば、……農村共同体

58) Ar. S. 327, (19) 396~397ページ。

59) Ar. S. 329, (19) 398ページ。

は、まもなく、ロシア社会を再生させる要素として、資本主義制度によって隷属させられている諸国に優越する要素として、発展するであろう」⁶⁰⁾。マルクスはここで、一見すると「理論的な問題」と実践的な問題を切り離して議論しており、ここでのロシア革命論は議論の飛躍のようにみえるかもしれない。しかし、接合理論と階級同盟の視角からマルクスのロシア社会論を分析してきたわれわれにとっては、支配階級のロシア最大の生産力である農民にたいする抑圧と搾取、すなわち支配階級の農民にたいする階級闘争にたいして、農民の抵抗と闘争を一つの「ロシア革命」として叙述することは当然のことだといっよい。マルクスは「ザスーリチへの手紙」において、ロシア革命をヨーロッパ革命とさしあたり係わりなく、内発的に発生するものとして叙述しており、この点が最晩年のマルクスの一特徴といっよいのであるが⁶¹⁾、このロシア革命論は、資本制的生産と共同体との接合理論や、支配階級間の階級同盟によって裏づけられているのである。そして、資本制的生産と共同体との強制的接合は、たんにロシア農民にたいする支配階級の階級同盟を明らかにするだけではなく、国家と支配階級にたいする農民の闘争の必然性をも明らかにするのである。

それゆえ、接合理論と階級同盟の視角からロシア社会論を検討するならば、第1草稿末尾のロシア革命論は、この草稿の中程にあるロシア農民の「全般的な蜂起」にかんする断片的な叙述の延長線上にあるのである。

最後に、レイが晩年のマルクスにみたのとまさに逆に、マルクスがここで農民運動を視野におさめていることを確認するために、次の文章を引用しよう。

「だが、この共同体にたいして、国有地を除外して土地のほとんど半分を、しかもその最良の部分を、その掌中に握っている[地主的]土地所有が、対峙している。この面からみて、『農村共同体』をいっそう発展させる道をつうじてのその維持は、ロシア社会の全般的運動と合致するのである。ロシア社会の再生

60) Ar. S. 329, (19) 398ページ。

61) 淡路憲治, 前掲書, 322~323ページ, 和田春樹, 前掲書, 179~182ページを参照。

は、この代価によってあがなわれる。(……)＜したがって、全般的な蜂起のただなかでのみ、この『農村共同体』の孤立、ある共同体の生活と他の諸共同体との生活との結びつきの欠如、一言で言えば『農村共同体』にいったいの歴史的創意を禁圧しているその局地的小宇宙性が、打破されうるのである＞⁶²⁾。日南田や和田がロシアの農民革命の視角から照明をあてたこの文章は、レイが提起した接合理論を、農民運動と関連させて発展させるうえで、貴重な理論的視座をあたえているのである⁶³⁾。

IV 結びにかえて——類型認識から歴史理論へ——

最晩年のマルクスは、資本主義的世界体制の周辺部に位置するロシア社会とそこにおける諸階級の対立と同盟を分析することによって、『資本論』と時論ないしは現状分析とを媒介する新しい理論領域を開拓しつつあった。そして、この中間的な理論領域を「歴史理論」と呼ぶとすれば、“後進資本主義分析から周辺資本主義分析へ”という視座の転換こそ、新しい歴史理論を要請するものなのである。言い換えれば、後進資本主義分析を通じて獲得された類型認識は、周辺資本主義分析を通じてより深められ、この類型認識または特殊性把握の方法として、歴史理論とも言うべきものが提起されたのである。本稿を結ぶにあたって、この論点を確認しておこう。

マルクスは「ザスーリチへの手紙」の下書きの中で、共同体的所有が全国的な規模で維推されているロシア社会に、資本制的生産が西ヨーロッパという「外部から」国家の仲介によって移植され、定着しつつある状況を批判的に分析している。この類型の資本主義は、資本制的生産が定着しつつある段階では「共同体」を温存＝利用し、農民の負担と失費によって発達するのだが、資本制的生産がその支配を確立するためには、「共同体」を解体しなければならない

62) Ar. S. 324～325, (19) 393～394ページ。

63) 日南田静真「コメント」(『マルクス・コンメンタールV』前掲書、所収)、和田春樹「ザスーリチあての手紙とその草稿」(前掲書、所収)を参照。

い。マルクスは、本稿でたびたび引用した「国家の仲介によって、農民の負担で養われているある型の資本主義」という規定によって、外部から移植された資本制的生産様式が、国家という政治的上部構造の仲介によって「共同体」と接合し、これを温存すると同時に解体することを理論化しているのである⁶⁴⁾。しかも、この型の資本制的生産の発展は、ロシア最大の生産力である農民の抵抗抜きには語ることができない。農民運動は、資本制的生産の世界的な普及＝外部からの移植に対する最も大きな抵抗としてたちはだかるものである。マルクスは、ロシア社会におけるこのような階級対抗を分析しながら、『資本論』で解明した経済的運動法則の実現ないしその貫徹を、促進したり阻止したりする経済的、政治的、社会的な諸関係の重要性を自覚し、『資本論』という原理的世界との関連で、その理論化を模索しているのである。

マルクスは「ザスーリチへの手紙」とその4つの草稿を書いたのとはほぼ同じ時期に、「アードルフ・ヴァーグナー著『経済学教科書』への傍注」を書き残している。彼は、『資本論』が直接には妥当しないような諸問題、共同体的所有の私的所有への転化や、ロシアの農民運動のような自生的な社会運動に取り組みながら、まさにそれと時を同じくして、批判的経済学は商品論を出発点としなければならないことを確認しているのである。彼は、一方で「商品」ではじまり「諸階級」で結ばれる『資本論』を完成させる努力をしながら、他方で『資本論』を超える問題群と取り組んでいるのである。「ザスーリチへの手紙」の諸草稿の範囲に限って言えば、マルクスは『資本論』をこえる問題を理論化するために、いわば『資本論』以前の問題については「農耕共同体」の世界史的位置にかんする歴史理論を、そして、いわば『資本論』以後の問題につ

64) 小谷汪之「共同体と本源的蓄積」（『共同体と近代』青木書店、1982年、所収）が鋭く指摘したように、マルクスは資本主義が「共同体」を利用する点は把握していたが資本主義が「共同体」を創出する点までは理論化していない。この問題は、世界システム論や接合理論などの、従属理論の諸潮流がマルクス経済学につきつけている論点と重なっており、原理論や歴史理論のレベルで活発な議論が期待される。拙稿「接合理論の展望」（『経済評論』1984年2月号）を参照。

いては諸階級の対立と同盟を批判的に分析する接合理論（歴史的環境論とロシア社会論）を構想していたのである。「農耕共同体」論をマクロの歴史理論とすれば、接合理論はミクロの歴史理論である⁶⁵⁾。マルクスは、ロシア社会論と苦闘する中で、『資本論』と後進国問題という問題設定で議論されてきた類型論的認識の限界を超え、「時論と理論とを媒介する新しい歴史理論」⁶⁶⁾という方法を進みつつあるとあってよいであろう。

フランス語版『資本論』で確立された資本主義にかんする類型的認識は、1875年以後のロシア社会論についての研究の進展とともに、そして『資本論』第2部と第3部を完成させるための純理論的な研究の深化に裏づけられて、歴史理論へと発展したのである。それゆえ、この歴史理論を重要なエレメントとして含む批判的経済学の学的性格は、「資本蓄積過程が不断に資本関係を再生産すると同時に、先資本制的社会諸関係を、資本が許容しかつ必要とする限りにおいて、大規模に再生産するものであることを内包している」⁶⁷⁾とあってよいのである。

しかし、マルクスの体系が一方では商品論を論理的端初とする原理論としての性格を有し、他方では資本主義の非ヨーロッパ世界への浸透を批判的に分析する歴史理論を内包するものであるといても、『資本論』と歴史理論との関

65) マルクスは『資本論』をこえる問題を理論化するために、マクロの歴史論とミクロの歴史理論を一体として分析している。平田清明「歴史的必然と歴史的選択」(前掲)は前者に重点をおきながら、両者の一体性を強調する。本稿は接合理論の視角からミクロの歴史理論に重点をおいたのである。

66) 望月清司「『資本の文明化作用』をめぐって」(前掲論文)、27ページ。星野中もまた、晩年のマルクス、エンゲルスの「小農」論を分析した一連の論文の中で、原理論(＝純粋化傾向論)と経験的事実とを媒介する歴史理論の必要性を指摘し、「先進国に学ぶことにより、資本主義発展過程の最終結果を免れる、という過程短縮論」(「第一インターナショナルと農民問題」(1)、『経済学雑誌』第83巻第1号、33ページ)を提起する。この「過程短縮論」は、「先進国は後進国の未来像である」(『資本論』第1版への序文)という考えを前提したものであり、資本主義の周辺部を分析したマルクスのロシア社会論と視角を異にするものであるが、『資本論』と新しい歴史理論の関連を考えるうえで重要な論点である。

係は、方法的に検討されるべき重要な問題を含んでいる。望月清司はこの点に関して、近年の従属理論が提起した論点を歴史理論への要請として受けとめながら次のように述べている。「一方で世界市場論や国家論を包括した新たな経済学批判体系(原理論)の構築とともに、他方で、……原理論的諸命題の展開を歴史的に促進または阻止したりする、またそれに抵抗する諸社会構成や諸生産様式の関係構造を明らかにしていく必要がある。私の現在の見通しでは、『要綱』ならびに『資本論』において……原理を確定する一方で、第三世界を残らずに包摂した歴史理論——とりわけ狭義の従属理論と協力しあえるような『諸生産様式の接合』理論を中軸として——を模索する動きが世界的に高まっている」⁶⁸⁾。晩年のマルクスは、本稿で詳しくみたように、資本主義の周辺部に位置するロシア社会を研究し、ヨーロッパと非ヨーロッパとを比較社会的に考察しながら、原理的展開と新しい歴史理論の構築とを同時に追求していたのである。「ザスーリチへの手紙」とその4つの草稿を執筆していた時のマルクスは、生涯でもっとも充実していた時期のひとつを生き、認識上の飛躍をむかえつつあったといってよいであろう⁶⁹⁾。彼は「発展途上国」の問題ないしは低開発問題という、後に20世紀最大の問題となる課題に取り組んでいたのである。それゆえ、マルクスのロシア社会論を周辺資本主義の視角から検討することは、『資本論』と歴史理論との連関という方法論的問題も含めて、マルクスの方法を用いてマルクスをこえるという、実り多い問題領域に通じるので

67) 平田清明『社会形成の経験と概念』岩波書店、1980年、93ページ。

68) 望月清司『『資本の文明化作用』をめぐって』(前掲論文)、29ページ。

69) Teodor Shanin, op. cit., pp. 30~33.

70) 本多健吉は『低開発経済論の分析視角』(『低開発経済論の構造』新評論、1970年、所収)において、「原理的視角と歴史的視角」との「並存」こそマルクス固有の方法であることを指摘し、マルクスの後進国発展像を「単一的発展像」(『資本論』の段階)と「複合的発展像」(晩年のマルクス)とに区別する淡路憲治の見解を批判する。マルクスのロシア社会論を後進資本主義分析としてではなく、周辺資本主義分析として把握し、原理的展開と時論とを媒介する歴史理論の中軸に接合理論を位置づけることによって、本多の問題提起を発展させることができる、と私には思われる。

ある⁷⁰⁾。この視角は、『資本論』と後進資本主義分析という問題設定で議論されてきた類型論的認識や段階的認識の枠をこえて、原理的世界と時論とを媒介する新しい歴史論を構築しようとするものである。

本稿は、「ガスーリチへの手紙」とその草稿を歴史理論の中核に位置する接合理論の観点から読むことによって、『資本論』と歴史理論という方法的問題に接近しようとしたものである。『資本論』を生産様式接合の理論として再構成し、中心部における資本主義発展と周辺部にたいする資本主義の浸透とを一個同一の理論的枠組で説明しようとしたレイのマルクス研究が、この手紙の諸草稿の検討を欠いているだけに、かつまた、マルクスの方法を用いてマルクスを現代につなげるためにも、晩年のマルクスの理論的営為のうちに接合理論的視角を発見することはきわめて重要であると思われる。

なお、歴史理論を類型認識ないし特殊性把握の方法として展開するためには、資本と国家、資本と世界市場、共同体と市民社会、従属理論（とくに世界システム論）と市民社会論、周辺資本主義における市民社会と国家などの問題を検討する必要があると思われる。これらの問題の検討は他日を期し、類型認識から歴史理論への視座の転換を提起したところで本稿を結ぶことにしたい。